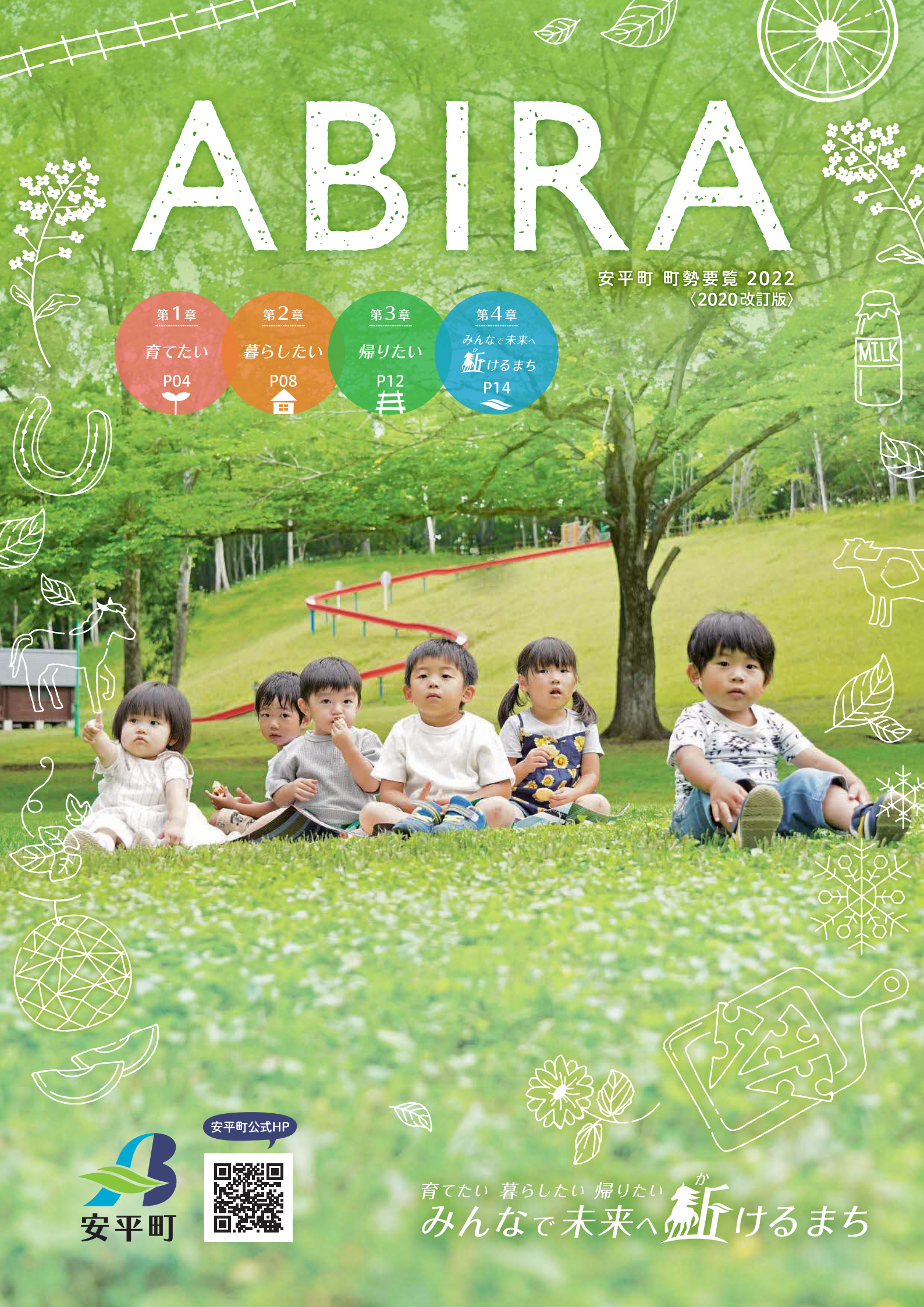
ABIRA

安平町 町勢要覧 2022
〈2020改訂版〉

第1章 育てたい P04
第2章 暮らしたい P08
第3章 帰りたい P12
第4章 みんなで未来へ 新(か)けるまち P14



安平町公式HP

安平町

育てたい 暮らしたい 帰りたい
みんなで未来へ 新(か)けるまち

「育てたい 暮らしたい 帰りたい みんなで未来へ駈けるまち」

この要覧では、「人」「誇り」「エネルギー」をキーワードに、
まちの人と作り上げた「総合計画」で目指している「いま」から「未来」に向かって取り組むまちを表しました。
子どもたちが安心してのびのび育つことのできるまちはみんなにやさしいまち。
生活の支えのある安全で安心して健やかな暮らしのできるまちはみんなに心地よいまち。
受け継がれた思いや誇れるもの、愛着のあるまちはみんなが帰ってきたいまち。
未来に向かって、ひととひとがちからをあわせ挑戦するまちはゆたかな未来をつくるまち。

沿革

1889年（明治22年）	植苗村美々からフモンケ（現早来富岡）に入地・開墾
1892年（明治25年）	北海道炭礦鉄道室蘭線・夕張線開通、追分停車場開業
1894年（明治27年）	早来駅開業
1900年（明治33年）	安平村開村・早来に戸長役場設置
1901年（明治35年）	安平駅・遠浅駅開業、由仁早来間道路開通
1933年（昭和 8 年）5 月	国内初となるチーズ工場が誕生
1952年（昭和27年）8 月	安平村より追分が分村
1966年（昭和41年）6 月	早来～沼ノ端間の新国道234号線工事が完了
1975年（昭和50年）12月	D51 241が追分～夕張間を蒸気機関車日本最後の走行
1981年（昭和56年）10月	日本国有鉄道石勝線開通
1999年（平成11年）10月	道央自動車道千歳恵庭JCTと夕張ICを結ぶ道東自動車道開通
2006年（平成18年）3 月	追分町と早来町が合併し安平町誕生
2018年（平成30年）9 月	北海道胆振東部地震発生
2019年（平成31年）4 月	道の駅あびらD51ステーション開業

概略

安平町の地勢は、西側を馬追丘陵から続く標高100m～150m程の丘が北から南に走っており、東側は夕張山系に連なる山地となっています。また、追分から早来にかけて南北に安平川が流れ、苫小牧市街東方で太平洋に注いでいます。地質は、樽前系の火山灰土に覆われています。

気候は年間平均気温が6.5度と北海道の平均と比較すると暖かく、また、年間降水量は1,000㎜程度で、降水は7～9月に集中しており、冬期の積雪は北海道では少ない地域となっています。

面積は237.16㎢で南北に長く比較的大きな遠浅、早来、安平、追分の4地区が南北に連なっています。

人口は令和4年1月現在7,394人で、道内市町村では中位よりやや多い規模となっています。

安平町

町章

「ABIRA」のABを元に、安平川となだらかな丘陵を持つ豊かな住環境を意図しました。
やさしい風のそよぐ、さわやかな自然に抱かれて発展する安平町を表現しています。

第1章

安平町は子育てしやすいまち

子どもが大人になったとき、
自然のこと、人のやさしさのこと、
たくさんの思い出を語れるふるさと。
のびのびと育った子どもは、
きっと豊かな人間性と大きな可能性に育まれ、
未来のこのまちで輝く存在となっていくでしょう。
安平町は、地域みんなで協力し、
子どもたちが主人公となるまちを
目指しています。

安平町公式HP
子育て・教育

CFCI実践自治体として日本初の承認！

令和3年12月、安平町を含む5団体がCFCI（子どもにやさしいまちづくり事業）実践自治体として日本初の承認を受けました！
こどもにやさしいはみんなにやさしい。
そんなまちづくりを進めています。

心の安心　相談場所があるので安心！

▶ワンストップで子育てを支援

「妊娠」「出産」「子育て」は初めてのことだらけ。何を準備したらいいの？元気に育てるには？など、色々な不安や悩みについて、「子育て世代包括支援センター」と「発達支援センター」が支えます。全ての子どもの権利を守るため、子どもとその家庭および妊産婦などを対象に、福祉に関する必要な支援を行う「子ども家庭総合支援拠点」。ワンストップで子育てを支援しています。

場所の安心　お迎えが便利。1歳からの保育で安心！

▶忙しい皆さんを支える5つの機能

1つの施設の中に、子ども園・放課後児童クラブ・児童館・子育て支援センター・発達支援センターと5つの機能を集約しています。

たくさんの親子が集まる場所。子ども同士のみならず、保護者同士のコミュニティの場にもなっています。そして何より、兄弟姉妹がいてもお迎えが1か所で済むのも魅力的です。

子育て世代に4つの安心。

子どもの成長に合わせた支援。子育て世代に選ばれるまち。

出産の安心　妊娠・出産費用も安心！

▶特定不妊治療に町独自の助成

女性が行った場合は最大で30万円を、さらに男性も治療を行った場合は10万円を追加で助成します。

▶妊婦健診の受診料金を助成

妊婦健診14回分と超音波検査11回分に対し、総額112,770円（令和3年度）の助成を行っています。

▶妊婦健診等での通院に係る交通費を助成

最大16回分の通院に対し、総額22,880円の助成を行っています。

医療費の安心　高校生まで医療費も安心！

▶病院にかかるとき

高校生以下は、保険診療分に限り、無料で受診できます。

▶歯科医院にかかるとき

高校生以下は、保険診療分に限り、無料で受診できます。

▶インフルエンザ予防接種

中学生以下は、町内の病院に限り、1回550円で予防接種ができます。

子育ての悩みや不安。安心して相談できる体制

子育て世代包括支援センター

実家が遠方で協力を得るのが大変、知らない土地で子育ての相談をする人がいないなど、子育ては色んな不安を抱くことがあるでしょう。町の保健師による新生児訪問をはじめ、妊娠、出産、子育てのさまざまな不安や疑問などを町の専門職員が相談に応じ、安心して子育てできる環境づくりのお手伝いをしています。

発達支援センター

他の子と比べて、うちの子の成長が遅いかも。集団生活をしていく中で、このように感じてしまうことがあるかもしれません。

発達相談や言葉、身体の発達が緩やかなど、子どもが抱える悩みを遊びを通じてトレーニングし、克服していける環境を整えています。

子ども家庭総合支援拠点

子育てが辛くなった、子どものしつけに困っている。そういった悩みの相談はもちろんのこと、離婚や養育費、ひとり親家庭、DV、いじめ、虐待、不登校など今後の子どもの成長や親子生活に関する悩みなどを相談できる体制があり、不安を取り除き安心して生活、成長できる支援をします。

子どももお母さん・お父さんも安心できる場所

放課後児童クラブ

学校が終わった子どもたちが安心して過ごすことのできる「放課後児童クラブ」があります。

利用は無料で、学校が長期休業中でも開所しており、お仕事をしている家庭の方にも優しい環境。

同じ学年の子ども同士だけではなく、年齢の上下問わず仲良く遊んでいる姿やみんなで宿題に励む姿があります。

進学後の通学に適したまち

勉学面も安心の環境

地方での子育て。「子どもの進学先が悩み」と思う方もいるでしょうが、安平町では心配ありません。

町内には１つの道立高等学校があり町内在住者が進学するケースもある一方で、公共交通を用いた町外への進学も多く見受けられます。

地方で生活しつつも、勉学の機会を保つことのできる環境です。

町内の中学生の
卒業後の進学先について

安平町内	3人
千歳市	2人
苫小牧市	32人
札幌市	3人
その他道内	15人
道外	0人

※令和2年度卒業生実績（総数55人）

子どもたちは、次世代を担う宝です。

子どもたちが安心して学ぶことができ、新しい時代に向かってたくましく成長していけるよう、学校と地域が力を合わせ、国際社会にたくましく生きる人材の育成を目指します。

写真提供：はやきた子ども園

こども園

子どもの未来を育む

町内にある2つの幼保連携型認定こども園では、友達との共同生活から思いやりを持った行動を自ら学び、身近にある自然や動物とのふれあいから命の大切さなどを学んでいます。

子ども

北進の
ティスペー
そういっ
といった
「遊育」を

安平町での子育てを選んだ方々に聞きました

安平町に住んでいます

安平町在住／東京都から移住

齊藤さん

Interview

子どもが子どもらしく成長できる場所

東京に住んでいたときは、子どもが元気いっぱいに遊べるのは公園くらいで大きな声を出すのにも抵抗がありましたが、安平町に来てからは、地元の子どもたちが大きな声で笑って、元気に遊び回っている姿を見て「いいな」って思います。自然いっぱいの中で遊べるのは北海道の魅力だし、その魅力が教育になっているのは親としても嬉しい環境です。

（この記事は2020年初版発行時のものです。）

苫小牧市から通っています

苫小牧市在住

村田さん

Interview

母親の私自身が通いたくなるこども園

「自然豊かな園が安平町にある」と知って隣町から通園しています。園庭に馬やニワトリがいて、動物と触れ合うことで優しさとかを知ってくれそうだなって。

そして、遊具がたくさんの園庭や大きな木がたくさんある森が子どもたちの遊び場であり、学びの場。自然もさることながら、ロボットなどのデジタル機器を活用した教育プログラムもあり、恵まれた環境にいる子どもが羨ましいです！

（この記事は2020年初版発行時のものです。）

遊育

の身体を育む

森での自然探索や街中にあるコミュニスでの遊び。
た「遊び」を通じての協調性や表現力非認知能力、体力の向上を期待し推進しています。

学び

子どもの可能性を育む

好奇心や探求心、想像力といった感性は、進路・就職といった未来を考えるときに大きな影響を与えます。

そんな「感性」を、学外における学びの拠点「あびらぼ」での外国人との交流やゲストを招いての講演会など、学校とは違う「学び」の場で培っていきます。

ふるさとは大きな学校 ～基幹産業にふれて育つ～

ふるさと教育

安平町は、「地域で子どもを育てる」という意識が強いまち。それを象徴するのが、「ふるさと教育」です。稲作体験や安平川での魚卵や稚魚の放流体験、町内の企業（軽種馬牧場など）での就業体験を通じ、地域の産業や文化を学ぶことができます。子どもの頃に育まれた感性や刻まれた記憶は、まちへの愛着と誇りを生むとともに、子どもたちにとって人生の大きな財産となることでしょう。

第2章

安平町は暮らしたいまち

基幹産業である農業、交通・物流の要衝として恵まれた立地を生かした商工業。それら、暮らしを支える産業が発展し続け、安心して生涯住み続けることができるまちを目指しています。

農業

地域全体を潤す大地の恵み。

農業では、畑作、稲作、酪農、畜産、軽種馬を中心とする土地利用型農業と特産品のアサヒメロンに代表される高収益型農業を組み合わせた多様な経営が行われています。特に軽種馬では、毎週のように安平町で生産された馬が活躍しています。また、新たに農業を始めたい方たちへの就農支援も積極的に行っています。

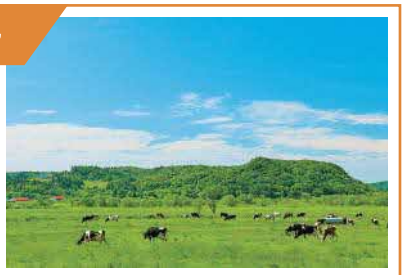
安平町公式HP
地域振興・団体

畑作・稲作・そ菜

安平川流域には水田が広がり、火山灰土壌の丘は先人の努力により畑作地や牧場となりました。このように地勢や気候など自然環境を生かしながら、小麦や甜菜、大豆などの土地利用型作物やアサヒメロンやアスパラガスなど高収益型そ菜の栽培が行われています。

近年では、鮮やかな黄色が観光客にも人気の菜の花の作付けが増えています。

酪農・畜産



先人の先駆的な酪農振興の伝統が引き継がれており、乳用牛検定で全道一となった牧場をはじめとし、適切な飼育環境づくりに取り組み、質の高い酪農業を行っています。

また、肉用牛では、素牛と呼ばれる肥育前の牛の生産が盛んです。そのほか、採卵鶏や肉用鶏の生産、養豚なども行われています。

軽種馬

安平町は名馬「ディープインパクト」のふるさとです。日本でも有数の馬産地の1つとして、多くの競走馬を輩出し、日本だけでなく海外のレースでも活躍しています。

移住して 安平町で挑戦 新規就農

アサヒメロン生産者
正村（しょうむら）さん

安平町が誇るアサヒメロンをもっと有名にしたい！

Interview

「農業をやってみよう」と思い参加した移住や就農に関するイベント。そこで、安平町の特産品のアサヒメロンを生産している先輩のお話を聞いたり、心配事などを相談しているうちに農家になっていました。

就農希望者には、先輩農家さんが2年間、研修機関として付いてくれるので、技術面・精神面でも安心して農業に取り組めました。

今の目標は、先輩のように技量を高めていくことと、安平町の農業を盛り上げる新規就農者の仲間が増えること。こういった夢が見られるのも、サポート体制の充実のおかげだと思っています！

（この記事は2020年初版発行時のものです。）

商工業

恵まれた環境を背景に、大きな期待が膨らみます。

空の玄関「新千歳空港」と海の玄関「苫小牧港」、2つの国際港へのアクセスが車で30分以内という立地条件は、当町の誇りです。広大な土地と降雪量が少ない気象などもあり、道内外に拠点を置く企業に選ばれています。

また、当町の誇るD51 320を生かした道の駅を平成31年にオープンし、観光を中心としたヒト・モノの活性化を推進しています。

商業

商業では、プレミアム商品券の発行による町内消費拡大を図っているほか、既存店舗後継者対策として血縁に頼らない事業承継が出てきています。

「道の駅」開業以来、交流人口が増加しており、施設内販売はもとより、地域商店の意識変化や起業意欲の高まりが生じており、施設周辺でもコーヒーショップの新店舗も誕生するなど新たな効果が出てきています。

（この記事は2020年初版発行時のものです。）

安平町で挑戦！事業承継

平成28年に札幌市から家族で移住しまちの商店を継いだ小納谷（こなや）さん夫妻▼

工業

町内には早来臨空工業団地など4つの工業団地・適地があり、大型の優良企業が多数操業しています。それぞれの団地等の状況に応じ、環境保全施策などの措置が講じられています。また、工業団地以外の場所にも国内最大規模の太陽光発電所（メガソーラー）の設置や食肉加工場が操業しています。

起業創業支援

令和３年度開始した、育つ起業家を創る移住・起業プログラム「Fanfareあびら起業家カレッジ」をはじめ、チャレンジのフィールドとなる「チャレンジショップ」「お試しサテライトオフィス」などの整備。持続可能で活力のあるまちづくりに向け、起業や創業に向けた取組みの支援を行っています。

数字でみる施設・交通機関

令和4年1月現在

安平町民の日々の暮らしを支える生活インフラ。
みんなの暮らしにちょうどいいまちづくりを推進しています。

健康福祉

元気よく生きたい、暮らしたい

暮らしの心地よさは、毎日健康に過ごせることや自分のコミュニティの中でお互いの気持ちが通じ合い、安全で安心して生活ができることにあります。そうしたまちづくりを進め、笑顔の絶えない暮らしを支えます。

安平町公式HP
暮らしと手続き

健康状態を知ることが健康で過ごすことの第一歩

いつまでも健やかに過ごして欲しい。そんな思いから、健康診断、ガン検診はすべて無料。お年寄りだけではなく、若いうちからしっかりとした健康管理が必要です。毎日元気で働ける喜びを感じる、安心の暮らしを守ります。

病気のときも、町内2地区にある身近な医療機関で診察、適切な処置が行われ、必要に応じ転院などの対応が行われます。

健康状態を知って、より健康で元気のある生活へ

いつまでも元気でいて欲しい。そんな思いから、身体内部の体脂肪や筋肉量などを測定するインボディ事業を行っています。インボディ事業を通じ、運動のきっかけづくりを行い、まちのプールで行われる教室などへの参加を促し、そのほかにも食生活から始める健康づくり支援として、管理栄養士による食の相談なども行っています。

楽しみながら身体を動かす小さいまちでも施設は充実

2つの野球場、スキー場、屋内外のスケートリンク、屋内プール、2つの屋内ゲートボール場、テニスコート、パークゴルフ場、そのほかアスレチックのあるキャンプ場、そして森の中の自然を満喫しながら遊ぶプレイパーク。そんな施設を利用して、水泳やヨガ、ノルディックウォーキング教室など健康で長生きできるための取組みを進めています。

そのほか、高齢者向けには「足腰しゃんしゃん教室」などを行い、地域全体での健康づくりを進めています。

移住して 安平町で挑戦 介護支援

ケアマネージャー
土屋さん

Interview

小さい町だからこそ深くケアできることに誇り。

受けられる制度や支援を利用者さんにお伝えし、行政との橋渡し役を担い、安心できる生活を組み立てることがケアマネージャーの仕事の1つです。

大きな規模のまちだと隣人関係が希薄になりがちですが、安平町は地域住民同士で支え合う姿もあるなって。それは、まちの強い魅力だと思うんです。

そういった環境だと、ケアマネージャーとしても仕事がしやすく、素早い対応や親身な関わりに繋がっています。一体感のある地域性や小さなまちだからでしょう。高齢になっても安心して過ごせるよう、行政と連携をとりつつ、安心して生活できるまちであり続けられるために頑張りたいです。

（この記事は2020年初版発行時のものです。）

安心のコミュニティ

いつまでもこのまちで

高齢者の相談窓口　地域包括支援センター

地域包括支援センターでは、総合相談窓口として「認知症対策」「在宅医療・介護連携」「高齢者虐待・成年後見」「介護予防」に取り組み、住み慣れた地域で暮らし続けることができるよう支援します。最近では、サロンや通いの場が多く開催され、職員が赴いて健康教室や健康相談を行い、健康寿命の延伸を目指し介護予防事業として足腰しゃんしゃん教室を開催しています。いつまでも安心して暮らせるよう高齢者の皆様をサポートします。

支えあい、助けあい

地域福祉

町民一人ひとりが日常的に生活や仕事の中で、新聞が溜まっているなど「ちょっとした異変」に気づいたとき役場に連絡する「見守りネットワーク」があり、高齢者やしょうがい者、子どもたちが地域で安心した暮らしができるよう町内全体で見守り活動を行っています。

災害への備え

自主防災組織

災害はいつ起こるか分かりません。日頃からの備えが必要なことから、住民自らの防災意識を高めるため町内会や自治会が中心となって自主防災組織を設置、運営しており、町は支援を行っています。各組織ごとに避難訓練や防災キャンプに取り組んでいます。

移住して 安平町で挑戦 宿を開業　白川さん夫妻

Interview

ノースゲートインアビラ
白川さんご家族

クオリティオブライフ＝生活の質という考え方を大切にして。

▌安平町は日本でも有数の場所

東京都からの移住です。安平町は「北海道に行きたい！」と思い立てば、国内の主要空港から昼過ぎには到着できる利便性の良さが魅力。この町を拠点に道内を廻ることも出来るし、地産地消の産物にも恵まれ魅力的です。

▌おためしで現実的に！

移住前に「おためし暮らし」を利用し、安平町での生活を体験しました。その土地の気候風土を知ることで、家を建てる上でも安心して移住できました。自然との生活で、今までにない価値観に気づかされました。

▌培ってきた信頼は何にも代え難い価値があります。

今年で移住7年目となりました。人と人との繋がりが出来て、それがさらに深まっていく。培ってきた信頼は何にも代え難い価値があります。都会に暮らしていたときと比べ、全く違う価値観がそこにあります。

（この記事は2020年初版発行時のものです。）

移住支援
「おためし暮らし体験」

安平町に移住を検討している方を対象に、町内での生活を体験することで移住促進に繋げるため、移住検討者の受入を行っております。

第3章

安平町は 帰りたくなるまち

安平町の魅力をご案内します。

ABIRA

ふるさとから羽ばたいていった子どもたち、これから穏やかな田舎暮らしを望むご家族、訪れてみたいと思っていただいた人。町はそんな方々のホームタウンでありたいと考えています。

まちのシンボルSL、全国に誇れるメロン、色鮮やかな菜の花畑、活気に満ちたまつり。この町にはあなたのふるさとになれる財産がたくさんあります。

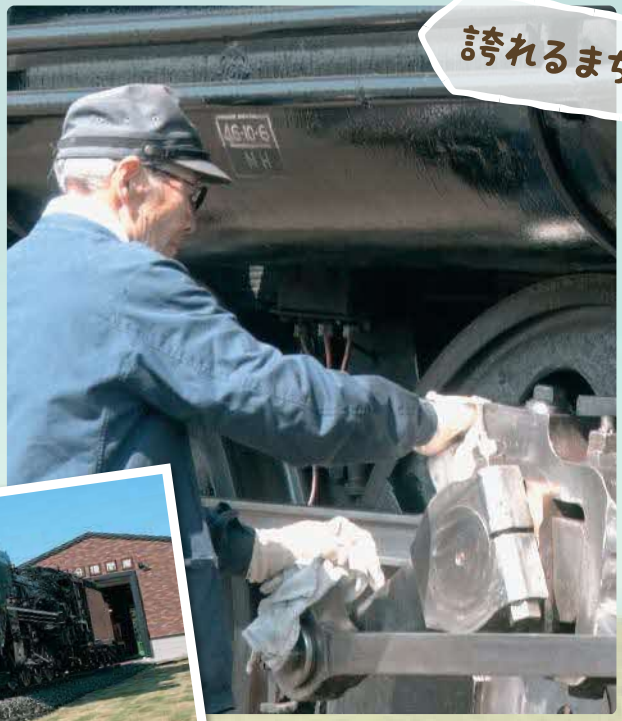
安平町公式HP
まちの見どころ

誇れるまちへ

SL

受け継がれてきた大切な想い。

明治25年の室蘭線、夕張線の鉄道開通とともに町の歴史が刻まれてきました。その町の移り変わりを見守ってきたSL。町はSLラストランの地として全国の鉄道ファンの間で有名です。その歴史を後世に残そうと、「安平町追分SL保存協力会」により、1両の機関車が廃車後43年にわたって大切に保存されてきました。その車両をシンボルに平成31年4月「道の駅 あびらD51ステーション」がオープンしました。時代が移り変わっても、SLは私たちを見守っています。



元気なまちへ

うまかまつり

夏を盛り上げるイベント。

うまい食べ物、うまい芸、馬産地、町の自慢の3つの「うま」が融合し、2日間にわたって開催される夏の一大イベント「あびら夏！うまかまつり」。アサヒメロンや、はやきた和牛など町自慢の味覚が勢ぞろいするほか、「うまか杯ポニーサイクルGP」は参加した人も見ている人も白熱します。また、1日目の最後には1,200発の花火が、ふるさとの夏の夜空に美しく舞い上がります。

美味しいまちへ

アサヒメロン

甘い宝石はまちのブランド。

みずみずしく糖度の高い赤肉メロン「アサヒメロン」は、安平町の特産品。北海道自慢のメロンです。寒暖の差がある気候が甘いメロンづくりには最適。土壌づくりと有機質肥料と合わせ、おいしいメロンが誕生します。甘味がしっかり、そしてあっさり。これからもおいしいメロンを全国の皆さんにお届けします。

美しいまちへ

菜の花畑

大地に広がる黄色のパノラマ。

写真提供:鉄道写楽家 矢野友宏

四季折々にいろいろな花が咲き誇る大地。その中でも初夏の菜の花畑は、自然が作り出す素敵な光景です。菜の花畑は、連作による病害を防ぐため、毎年場所を変えて作付けされています。そのため今年見られた場所で、来年もまた同じ黄色い光景が見られるというものではありません。まさに一期一会の出会いとなっています。

まだまだある! 安平っていいね。

チーズ

昭和８年、日本で初となるチーズ工場が誕生し、地域の発展に貢献してきました。その灯は受け継がれ、カマンベールチーズは多くの方々に愛されています。

鹿公園

日本最古の保健保安林内にある鹿公園。季節を感じられる豊かな自然の中にあり、キャンプ場も併設されています。多くのファミリーに親しまれている公園です。

馬がいる風景

これまで、数多くの名馬を輩出しています。どこまでも澄んだ青空の下、馬が自由に駆け回る。のどかで広大な風景は町の自慢です。

安平を離れていても、いつも安平を想っている。

ふるさと納税

今は離れて暮らしているが、自分を育ててくれたふるさとに恩返しがしたい。お世話になった町を応援したい。生まれ故郷でなくても愛される町を目指しています。

企業版ふるさと納税

未来へつながる復興まちづくり事業などといった新しい試みを少しずつ始めています。そんな町を応援してくれる企業と一緒にまちづくりを行うことができる新しい取り組みを始めています。

東京あびら会

平成30年11月に誕生した「東京あびら会」。安平町出身者やまちとゆかりのある企業など会員数は64を超えています。今後も、いろいろな方に参加いただき、一緒にまちを盛り上げていきたいです。

第4章

安平町は みんなで未来へ駈けるまち

令和2年7月3日、来場者数100万人突破！
トリップアドバイザーの
「旅好きが選ぶ！日本人に人気の道の駅ランキング2020年」で
15位という栄誉に輝きました。

未来に向かって挑戦する

安平町の道の駅は、質の高い農産品などの提供や歴史的資産の展示にとどまらず、
町内外の人々の様々な活動を結び、地域全体の活性化を図るフィールドを目指します。
石炭に関連した産業遺産のネットワークである「炭鉄港」と連携した取り組みや多様なイベント開催を通じ、
地域間交流や情報発信を進めていきます。
道の駅そのものが地域のビジネスチャンスをつくり、町民自らが活躍する場を生み出せる仕組みづくりを進めていきます。
道の駅あびらD51ステーションは未来へ向かう「交流」「発信」「挑戦」の拠点です。

道の駅あびらD51ステーションHP

～未来をつくる仕掛け人たち～ 道の駅あびらD51ステーションにかける想い

安平町の歴史的資産を世界へ

＼北海道鉄道観光資源研究会 矢野さん／

安平町が建設する道の駅が「SL」をテーマにすると知り、石勝線開通時に登場した特急おおぞらのキハも「SLとともに町の発展に寄与した文化として置けないか?」と安平町に相談。職員の方々も賛同してくださり、インターネットを通じた資金調達に挑戦。全国からの関心と応援を得て、なんと実現する方向に歩み出し、設置することができました。

北海道の鉄道史での「追分」の重要性は、「炭鉄港」のストーリーが「日本遺産」に認定されて、ますます高まりました。これまで日本中のＳＬファンが「追分」を訪れ、多くの旅人が「特急おおぞら」で旅をしました。

ここから発信する鉄道の魅力が、全国へ、世界へ届いて、さらに多くの旅人を惹きつけるようになるとうれしいです。

（この記事は2020年初版発行時のものです。）

未来へ残す2台の車両

札幌と道東方面を結ぶ石勝線が昭和56年に開通した時に誕生したのが、『特急おおぞら』などで活躍した「キハ183系」の車両です。しかしながら、その車両も時代の移り変わりとともにその役目を終えました。

役目を終えた車両について、保存予定の車両は1両もなかったところ、北海道鉄道観光資源研究会の協力により、安平町への保存が実現しました。蒸気機関車からバトンを引き継いで北海道の一時代を走りぬけた「キハ183系」。鉄道文化を伝える存在として、「D51 320」とともに第2の人生を歩んでいきます。

生産者の誇り「農」にふれる

安平町の基幹産業である農業。その魅力を発信する場、生産者と消費者をつなげる場として「農産物直売所ベジステ」が誕生しました。

「ミニトマト美味しかったよ！」「茹でとうきび甘い！」届けられた声は生産者にとって、自分の挑戦に対する消費者の反応を肌で感じとる貴重な場となり、次への挑戦、明日への活力となります。

生産者の「農」への思い、誇りにふれることのできる場所であり、道の駅の看板となっています。

子どもたちの笑い声が響く場所「ポッポらんど」

道の駅と隣接する柏が丘公園に体験型の遊び場が令和3年4月に誕生。愛称は「ポッポらんど」、町民からの公募で選ばれました。遊びの中で子どもは育つ、夏は乗車体験のできる「ミニ蒸気機関車」や身体いっぱい使って遊べる「ふわふわドーム」。冬は地形を利用した「ソリ滑り」や「雪遊び」が待っています。子どもたちの大きな歓声が聞こえてくる道の駅の新たなシンボルとしていつまでも愛される公園を目指します。

安平の魅力がギュッと集まる

＼一般社団法人あびら観光協会 多（おおの）さん／

安平町には自慢できることがたくさんある！と思っていましたが、まちの魅力が散在し、どこか結びつきが弱い印象でした。

しかし道の駅ができてからは「まちの魅力が一堂に会する場所」として強く機能しているのを感じます。

菜の花畑を見にいらした方が道の駅に立ち寄って、周辺の見どころ情報を探したり、お土産をお求めになられたり。

今後も足を運びたくなるようなイベントや情報発信の充実を模索して「安平町に来て良かった！」と思っていただけるような道の駅づくりを目指してまいります。

（この記事は2020年初版発行時のものです。）

安平町から各地へ届け

＼生産者協議会 谷口さん／

「農作物の生産者をもっと身近に感じてもらいたい」「どんな農産物なら安心して手にとってもらえるだろう」。そんな想いから生まれたのがベジステです。

米・野菜・畜産などさまざまな農畜産物が、美味しさと安心安全に挑戦し続ける生産者らによって手掛けられており、そんな生産者にとってベジステは、農畜産物を通して皆さんと繋がることができる大切な場所なのです。

場所ができたから満足ではなく、多くの人に「安平町のものだから食べてみたい」と思ってもらえるように、そして「安平町」という言葉が更なるブランドになるよう頑張っていきます！

（この記事は2020年初版発行時のものです。）

地震を乗り越えて

未来へつなぐ、安平町の記録。

平成30年9月6日3時7分、胆振地方中東部を震源とした最大震度7（安平町は震度6強）の地震が町を襲い、多くの住宅や施設などが大きな被害を受けました。町では、発災後すぐに災害対策本部を設置し、被害状況の把握に努めるとともに、町の放送局である「あびらチャンネル」を通して、断水や通行止め、給水場所、災害ゴミの受け入れ状況などの情報提供を行っていました。全国各地から訪れたボランティアの活動を通して町が少しずつ本来の姿を取り戻す中で、町民にも明るさが戻ってきました。ボランティアの中には復興に携わるために移住を決断した方もおり、時間の経過とともに形を変えながら、今日の安平町を支えています。

復旧から復興へと移り変わっていく中で、コミュニティや挑戦の場を生み出し、安平町の未来に向けた動きが加速しています。

安平町公式HP
胆振東部地震

安平町の動き

平成30年9月	6日	3:07	地震発生
		3:40	災害対策本部設置
		3:45	町内全小中学校を避難所として開放
	7日		窓口業務再開
	13日		授業再開 （追分中学校・追分小学校・早来小学校・安平小学校） ※追分小学校は追分中学校を使用
	14日		授業再開（遠浅小学校・早来中学校） ※早来中学校は町民センターを使用
	18日		全町電気復旧
	29日		水道復旧
	30日	13:00	罹災証明集中発行開始（10/10まで）
10月	5日		罹災証明住家被害認定調査終了（第1次）
	10日		総務課に復興・生活再建支援室が設置される
	11日		罹災証明発行開始
11月	1日		仮設住宅入居開始
	30日		全避難所閉鎖
平成31年1月	15日		早来中学校仮設校舎で授業開始
	21日		追分小学校にて授業再開
2月	21日		安平町震災復興基本方針を定める
5月	16日		公費解体工事開始
令和元年9月	6日		復興祈念式典を追分公民館にて開催
12月	19日		安平町復興まちづくり計画策定
令和3年2月	13日		最後の避難指示が解除される
3月	31日		安平町災害対策本部解散
7月	1日		（仮称）早来地区義務教育学校建設工事着工

11月中（避難所閉所）

復興ボランティアセンター

「一人も置いていかない」

地震発生後、まちに希望や明るさを取り戻すために11月6日、一般社団法人安平町復興ボランティアセンターが設立されました。人が集い楽しめるイベントを催し、また、子どもたちのためにはあびら未来塾などの多岐にわたる活動を進めています。「8,000人の笑顔プロジェクト」では当時の早来小学校の6年生らに協力し、町を笑顔にしようと奔走、町内外で多くの注目を集め、たくさんの笑顔をもたらしました。

（復興ボランティアセンターは令和3年3月で活動を終了。後継団体が立ち上がり、町の未来のため活動を続けています。）

ABIRA
EDU PLAN

震災前よりも、
もっともっと魅力的なまちにしよう！

ここにしかない。ここでしかできない。

世界に近いまち

セカチカから あびら教育プランへ

学びから挑戦へ

幼いころから遊びの中でエネルギーを培う「遊び」。自ら考え、夢を見つける「学び」。夢を実現・表現の手助けとなる「挑戦」。「日本で一番世界に近いまちプロジェクト」（セカチカ）は3つの事業をつなげて、「学びから挑戦へ」をキーワードに、一人ひとりが夢の実現、新たな世界を築く事業を展開してきました。

その理念を引き継ぎ、新たな教育プログラム「あびら教育プラン」をスタート。ここにしかない、ここでしかできない、そんな取り組みを行っています。

フェーズ1 インプット		フェーズ2 アウトプット
遊び（遊育）	学び（探求学習等）	挑戦（実現・表現）
幼児～小学校高学年	小学校高学年～中学生	中学生

各事業の展開

遊び
「もっともっと」遊びたい。そんな子どもの願いを叶えるフィールドを提供。子どもたち自らが遊びを生み出す環境を創出。

学び
「わくわく」しながら毎日を過ごせるようなプログラムを提供。国内外の方と交流する機会の創出や、興味の種を蒔く「探求学習」の場を提供。

挑戦
インプットプログラム「遊び」「学び」を経て、気づいた夢・目標。それらを実現・表現するためのABIRA TALKSやワクワク研究所をはじめとしたアウトプットプログラムを提供。

新たな世界を築く

新たな世界とは、これまで知らなかった新しい領域です。立地を生かした事業や、学びと挑戦による体験を積み重ねることにより、より深い経験という宝物になります。それが礎となり、子どもの将来性・可能性を大きな世界へと広げていきます。

ENTRANCE 「未来への入り口」

「ENTRANCE」は、改修した空き店舗を利用した、コミュニティスペースです。

設置の目的
復興ボランティア活動が進む中で、センターとして安平町の未来を考えるようになり、「人が集まれる場所」「何かを創造し羽ばたいて行ける場所」を創り出したいとの思いから作られました。

名前の由来
場所は目の前にJR追分駅、地区でも人通りが多かった場所の一つです。駅前として“安平町の入り口”、そして“未来に羽ばたく入り口（きっかけ）”となることを期待して命名されています。

「ENTRANCE」の動きと地域の人たちの反応

ENTRANCEが作られていく過程で、強い思いに共感した人の輪が次第に広がっていきました。町内外から寄せられた多くの期待は、クラウドファンディングを通じてJR追分駅前で結実しました。

その後も励ましの声や昼食の差し入れ、中には使用可能な家具を提供してくださる方までおり、人々の温かい思いが支えとなり、2019年11月にオープンしました。

「ENTRANCE」が描く未来

将来を担う子どもたちが、「ENTRANCE」で学び経験したことを糧に、自分たちの夢を抱いて成長してくれることを願っています。

Interview

ENTRANCEを運営する方に聞きました

町民が情熱をもって集える場所。そして未来の安平町に向かって。
～安平町のこれから。未来をつくるエントランス～

地震が起きてすぐに北海道に来ました。その足で安平町に入り、災害・復興両ボランティア活動をしていく中で「ありがとう」という温かい言葉と笑顔に感動したんです。

「そんな言葉と笑顔が溢れるまち」だからこそ移住を決め、人のために活動を続けようと思いました。

ENTRANCEは、みんなの憩いの場になれば良いなって。そうなるためにも、みんなが興味を持てるような仕組み作りや運営に全力で臨みたいです！

一般社団法人
安平町復興ボランティアセンター
台さん

（この記事は2020年初版発行時のものです。）

総合計画は羅針盤

安平町では、未来創生委員会など様々な町民参画の機会をつくり、多くの町民の声や意見を活用してまちづくりを進めるため「SWOT（スウォット）分析」を行い、総合計画として目指すべきまちづくりの方向性を“まちづくりの将来像”として定めました。総合計画は、町民と行政が力を合わせてまちづくりを進めるための羅針盤となりました。

未来に駆けるまちの想い

都会に比べて、多くの町民がまちづくりに関わりを持っている安平町。

特に、世界で活躍するスポーツ選手を多数輩出する伝統を持つ当町では、
未来を担う子どもの可能性と希望をみんなで応援しようという歴史が長年受け継がれ、
地域の大人が先生、まちが1つの学校・家族となり、
体験活動や文化・スポーツなど様々な場面で子育てや教育が支えられています。
これが最も優れた“あびらの強み”です。

地域の支えにより育てられた子ども達は、やがて立派な若者へと成長し、
自分の可能性を信じて、外の世界へと羽ばたいていきますが、
泥だらけになって遊んだ子どもの頃の記憶、心温まる人情深い地域の人たちとのふれあいは、
忘れられない情景として心に刻まれ、
たとえ離れて暮らしていてもふるさとを思う気持ちを呼び起こすでしょう。

地域全体で子どもを育てるという“あびらの強み”を更に伸ばすことは、子ども達に楽しい体験を与え、このまちに住む子育て世代に安心感をもたらし、子どもとのふれあいを通じて高齢者の生きがいを高め、このまちに暮らし続けたいと思う気持ちへとつながり、同時に、都会に住む若者や子育て世代からも共感を生み、あの町で暮らしたい、あの町で子どもを産み育てたいという“選ばれるまち”へと結びつくでしょう。

『将来にわたって子どもの声が地域に響き、若者・子育て世代で賑わうまち』を目指し、
最も優れた“あびらの強み”を活かして、あらゆる世代の人たちができる範囲でまちづくりに関わりながら、
“みんなでこのまちの未来を創る”“未来に向かって駆けて行く”そんな姿をイメージし、
まちづくりの将来像を定めました。

「育てたい 暮らしたい 帰りたい
みんなで未来へ駆けるまち」

“想い”から“行動”へ

第2次安平町総合計画
～願いを叶えるためのアクションプラン～

第2次安平町総合計画を策定するなかで基本構想として将来像である願いが明確になり、その実現を図るための基本となる計画が定められました。

計画は「地域で子どもを産み育てる環境づくり」など子育て・教育分野、「地域コミュニティ活動の活性化」などひとづくり・コミュニティ分野、「持続可能な農林業の振興」など経済産業分野、「町民との連携・協働による健康づくり」など健康福祉分野、「職住近接を目指した移住・定住対策」など生活環境・生活基盤分野、「情報共有と知名度向上につながる発信力強化」など行財政分野の6つの政策分野で構成されています。

なかでも「最も優れたまちの強み」を持つ、優先すべき政策分野である「子育て・教育」を重点とし、次に子育て・教育分野の成長により、その効果が発揮される政策分野となる「移住・定住など関連する分野」を中心にし、施策展開が図られます。

また、北海道胆振東部地震の発生により中期基本計画内に「安平町復興まちづくり計画」が組み込まれ、「住まいの暮らしと再建」「災害に強いまち・ひとづくり」「産業経済の復興」「未来につながる復興」を基本方針に、未来に向けた復興と新しい安平町を創造する歩みを進めています。

安平町公式HP
行政組織・議会

届け、まちの想い

政策分野別に様々な情報があります。それらを多くのひとに知ってもらう手段として、幅広い年齢層に馴染みのある**広報紙**をはじめ、他自治体では類を見ないテレビで視聴する**あびらチャンネル**、届けたい人にすぐに伝えることができる**ホームページ**や**SNS**を活用しています。

私たちは、このまちで起きていることをいろんなひとに届けたい。そんな想いからあらゆる媒体を活用した広報活動を行っています。

あびらチャンネル

平成27年開局のあびらチャンネルは地上デジタル放送の空きチャンネルを利用して町内限定で視聴が可能。職員が撮影・編集を自ら行い、地域に親しまれる放送局を目指し、「アビラの出来事」などを放送しています。

そのほか、町行政の動きを理解するための大事な議会を「あびらチャンネル」視聴者にリアルタイムでお届けしています。また、災害に際しては町民にとって大切な情報を提供しています。

広報紙

まちの出来事を中心にお伝えする「広報あびら」と行政情報をお伝えする「広報笑顔」の2種類を毎月発行しています。

▲毎月5日発行

▲毎月20日発行

ホームページ・SNS

安平町 ホームページ

Facebook @town.abira

You Tube 安平町【公式アカウント】

LINE@ アカウントID：@abira アカウント名：安平町

さいごに 町長からのメッセージ

安平町は、「子育て世代に選ばれる町」を目指し、子育て世代に対する施策を重点的に行っております。しかしながら、そんな取組みを行っている矢先に北海道胆振東部地震を経験しました。全国各地から頂いた義援金や救援物資などの温かいご支援、ご声援は私たちの前へ進む後押しとなりました。頂いたご恩を胸に震災前よりも元気で魅力ある町を目指し、町民一丸となって頑張ってまいります。

この町勢要覧では、第2次安平町総合計画の将来像「育てたい 暮らしたい 帰りたい みんなで未来へ駈けるまち」に沿って、町の事業を紹介させていただきました。

この要覧により、まちづくりに取り組む人々の誇り、エネルギーを感じ取っていただければ幸いに存じます。

安平町長　及川 秀一郎

このまちをもっともっと知ってほしい。
このまちをもっともっと好きになってほしい。
この要覧を手に取ってくださったあなたに、
少しでも、そんな想いが伝わりますように。

発　行／安平町
編　集／安平町総務課
印　刷／東洋株式会社